

シンガポールの教育改革が小・中学校芸術科音楽に与えた影響

—1992/1993年改訂版と2002年改訂版のシラバスに着目して—

森 山 実 華

(本講座大学院博士課程前期在学)

Influence of Educational Reforms on Music for Primary and Secondary Schools in Singapore: The Revised Syllabus of 1992–93 and 2002

Mika MORIYAMA

Abstract

This study examined the influence of educational reforms on music for primary and secondary schools in Singapore. In the late 1990s, the Ministry of Education in Singapore embarked on educational reforms: the aim was to break away from a cramming style of education toward creating a superior educational system with the goal of developing thinking skills. In addition, the ministry undertook such moves as strengthening national education, promoting life-long learning, and shifting the focus in education from quantity to quality. The present study focused on the revised syllabus of 1992-93 and 2002 as many of the educational reforms took place at those times. This study compares the revised syllabi and analyzes them in terms of structure, aims and objectives, learning areas, and learning content and outcomes. The educational reforms were largely reflected in the revised syllabus of 2002. Notably, the direction of music education shifted from the revised syllabus of 1992-93, which emphasized learning about music as an end in itself, to the revised syllabus of 2002, which underscored learning about music as a means to some other goal. With the revised syllabus of 2002, the aim was on developing an understanding of and an open attitude toward local and global cultures, creativity and critical thinking skills, and social skills through learning about music. There were no clear differences with respect to learning content and outcomes between the two syllabi: there are basic and minimum knowledge and skills for music making and the aim with both was that students would expand upon those skills and that knowledge. However, in keeping with the times or social changes, notably with regard to globalization and developments in information technology, the revised syllabus of 2002 incorporated such elements as computer music, electronic instruments, and world music.

はじめに

シンガポール共和国は1965年にマレーシアから独立した。第一次産業や天然資源をほとんど持たない小さな国であり、その限られた国家規模のなかで人的資源を効率的に確保しなければならない政策的な事情と、中国系・マレー系・インド系からなる多民族・多文化社会を内包している社会的な事情がある（佐々木2005, p. 195）。

1960年代から1970年代後半にかけて教育システムが確立され、学校の建設や教員養成、教材や試験内容の全国的な統一が行われた。また、1966年には二言語主義が導入され、小学校第1学年から、すべての児童・生徒が母語と英語の両方を学ぶこととされた。この二言語主義は、それぞれの民族の文化的背景やアイデンティティの尊重と、国家の発展および国家の一体性と国民の帰属意識の保持という役割を担って

いる。しかし、二言語主義の要求は過剰負担や教育効率の減退を生じさせた。そのため、1980年に児童・生徒の能力に基づいて振り分けを行うストリーム制が導入され、徹底した能力主義による教育制度が運用された。能力主義は、学力に基づいて内容や進度を変えることのできる仕組みであり、能力さえあればチャンスは平等に開かれているという、多民族・多文化社会に合致するものであるとされる一方で、一旦低いレベルに振り分けられると、高いレベルへ移ることは困難であり、それ故に、激しい競争による学力偏重主義を生み出してきた。これを受け、シンガポールでは、詰め込み型教育から教育内容の多様化による思考力を養成する教育への変革が図られ、より優れた教育システムの構築を目指し、1990年代後半から、新たな変革期に入った。(財団法人自治体国際化協会(シンガポール事務所)2011)

従来からの課題である民族融和と国民統合に向けた教育の強化や、グローバル化が進展し、社会や経済状況、技術などが刻々と変化するこれからの世界の中で、生き残り繁栄していくための学習文化の創出と生涯学習の推進、および創造力や思考力を育成するための教育の質の転換などを目指す教育改革が進められてきた。この結果、PISAやTIMMSなどの国際的な学力調査において近年著しく高い成績を収めている。

このような教育政策や教育改革は教科の学習に、とりわけ音楽にどのような影響を与えたのであろうか。そこで本研究では、多くの教育改革が集中した時期の前後に改訂された小・中学校芸術科音楽シラバス¹⁾(1992/1993年改訂版と2002年改訂版)を取り上げ、構造やねらい、学習領域、学習内容や到達目標の観点から比較・検討することによって、教育政策や教育改革が小・中学校芸術科音楽に与えた影響を明らかにすることを目的とする。

1. シンガポールの教育制度の概要

現在のシンガポールにおける学校教育ではストリーム制が導入されている。義務教育は初等教育段階の小学校に限定され、基礎段階(第1~4学年)とオリエンテーション段階(第5・6学年)をもつ6年制である。前期中等教育段階は、大学前教育に接続する中学校と職業コースに分岐し、後期中等教育段階も含めて有償となる。中学校はさらに特進・普通学術・普通技術の3つのコースに分かれている。

音楽は、美術とともに芸術科の1つとして位置付けられており、小学校および中学校下学年(2年間)は必修科目として設定されている。しかし、中学校上学年(2~3年間)では、特別²⁾・特進コースでは選択科目であるのに対し、普通学術・普通技術コースには設定されていない。(神代2011, pp.101-110)

2. シンガポールの教育改革の概要

2-1. 国民教育

シンガポールは多民族国家であるため、民族融和をはかるとともに、国民意識や国民性を植え付け、全国民が1つの国家として一体となることが国家の重要な課題として認識されており、それらに取り組む「国民教育」(National Education)の推進が従来から求められていた。

1997年5月17日、当時の副首相リー・シェンロンがこれに関する演説を行い、学校教育を挙げて国家としてのまとまりや、国家を形成する1人の国民であるという意識や姿勢、共通の価値観を伝えていくことが強調された。なお、この国民教育は、それぞれの民族性の違いを一切なくし、単一なものにまとめようとするものではなく、それぞれの民族の文化や習慣を生かし、互いに尊重し合いながら、むしろその多様性を強みとして1つの国家を創り上げていこうとするものである。

社会や公民・道徳などの教科における学習にとどまらず、学校行事などの教科外の活動を含む学校教育全体を通して国民教育に取り組むことが示された。

2-2. 教育におけるITマスタープラン

1997年4月28日、教育省がICTを基にした教授・学習環境づくりの展開を目的に、「教育におけるITマスタープラン」(Masterplan for IT in Education)を発表した。

このマスタープランでは、情報技術が日々進歩している現代社会において世界に遅れを取ることなくシンガポールが活躍できるように、ITに強い子どもたちの育成が目指されている。学校と世界のつながりを

高め、学習環境をより豊かなものに拡充すること、創造的思考力と生涯学習を支援すること、教育の革新的なプロセスを支援すること、および教育システムの管理・運営を促進することを通して、子どもたちに創造的思考力や、自律的に継続して学習する能力、コミュニケーション能力、情報リテラシーなどのスキルを身につけさせることを目的としている。

そのために、マスタープラン1ではコンピュータや教育用ソフトウェアなどの配備や教師に対する指導支援策などが示され、ICT教育に関する基礎づくりが行われた。以降、2002年にマスタープラン2が、2008年にマスタープラン3が発表され、ICTを用いた教授・学習環境の充実を目指した継続的な取り組みが行われた。なお、マスタープラン3から「ICT」と示されるようになった。

2-3. 考える学校・学ぶ国家

現在のシンガポールの教育ビジョンとしても掲げられている「考える学校・学ぶ国家」(Thinking Schools, Learning Nation)は、1997年6月2日、第2代首相ゴー・チョク・トンによって提唱された。

ゴーは、国家の発展と経済成長の鍵は、国民の想像力や新たな技術やアイデアを生み出す創造力、どのようなものにも適応することのできる力などの「学ぶ力」にあるとし、シンガポールがこれからの激変する社会に対応していくためのビジョンはこの4語に集約されると述べた。TSLNは、児童・生徒や教師、保護者、労働者、会社、社会組織、政府を含むすべての者にとっての学習環境のことを指し、生涯学習の推進、および国家・社会全体で取り組む教育の姿勢が明示された。

これらを実現させるため、学ぶ力の効果的な育成が可能なカリキュラムの改訂や評価方法の構築に着手するとともに、コミュニケーション能力や自主的な学習習慣を身に付けさせるためのICTの使用拡充などが目指されている。また、教師が常に自己を高めるように促すとともに、児童・生徒や学校の状況に応じた教育を施すことができるように教師や学校により高い自律性を与えることが提言された。

2-4. カリキュラム改革

1996年、教育省は、経済や技術、社会のニーズなどの変化に対応するためのカリキュラムの改訂についてカリキュラム・レビュー委員会に諮問し、これを受けて翌1997年に同委員会が答申を行った。

この答申では、21世紀社会に適応するためにカリキュラムが目指すものは、学習者(常に新しい知識や技術を学び、自己を改めていくことのできる人間)・創造者(創造的に物事を考えることのできる人間)・伝達者(仲間と円滑にコミュニケーションを図り、他者と協同することのできる人間)の育成であると示された。また、試験に合格するための効率化を重視した受動的な学習が展開され、試験の点数のみで評価が行われていたこれまでの教育に対し、子どもたちは学校の基礎的段階ですでに燃え尽きていると異を唱え、詰め込み型の教育からの脱却を目指したカリキュラムの改革は必須であると述べられた。このような状況から、新しいカリキュラムでは勉強が楽しいと思える子どもを育て生涯学習の推進を図ること、より自主的・積極的で創造的な学習文化をつくり出すこと、社会性や協調性、コミュニケーション能力を育成すること、および学習過程や考える力を重視する多様な評価方法を取り入れることが目指された。これを達成するためにはカリキュラムの学習内容を削減することが必要であると述べ、小学校で最大20%、中学校およびジュニア・カレッジで最大30%の学習内容を削減することが提唱された。

この答申を受けて、1998年3月21日、教育省は全教科・全校種において最大30%の学習内容を削減すること、中学校とジュニア・カレッジにプロジェクトワークを導入すること、教師主導型の活動を20%削減して児童・生徒主体の活動時間を増やすこと、および様々な評価方法を導入し、点数だけで評価するのではなく、学習過程や考える力の育成につとめることなどが決定された。

2-5. 学校における芸術教育の拡充

2001年9月11日、教育省は学校における芸術教育のさらなる充実を目指し、「学校における芸術教育の拡充」(Enhancing Arts Education in Schools)を発表した。これは、主に中学校教育について述べられている。

ここでは、芸術教育の目的は「子どもたちの幅広い才能の発展と、芸術に関する潜在能力を高める」ことであると述べられ、学校における芸術教育では、多くの子どもたちに芸術に対する正しい鑑賞力や批評力を身につけさせ、未来の芸術の享受者としての基礎を高めること、未来の芸術家やパトロンを育成する

こと、および子どもたちの国家的・文化的なアイデンティティを高めることが目指された。

これらを達成するため、中学校普通技術コース下学年への音楽の授業の拡張、シンガポール美術館やシンガポール交響楽団等の芸術家や芸術団体との連携、および学校による芸術教育プログラムの施行を支援するガイドラインの作成や現役教員に対する研修の実施などが示された。

2003年には同名の文書が発表された。ここでは芸術科の教員養成について言及され、教育省と国立教育研究所、および南洋芸術学院が連携することによって芸術科教員の安定供給を目指すことが示された。

3. 1992/1993年改訂版シラバス

3-1. シラバスの概要と構造

1992/1993年改訂版のシラバスは、小学校と中学校で別々に作成されており、小学校は1992年に、中学校は1993年に改訂された。

シラバスの記載内容は表1に示すとおりである。

音楽の授業は、小学校基礎段階で週に2時間、オリエンテーション段階で週に1時間が割り当てられている。また、中学校では、特別・特進・普通学術コースの下学年・上学年ともに週に1時間（必修、試験無し）、普通学術コースには上学年にのみ週に1時間の音楽が割り当てられている。

学習内容や到達目標は、小学校は各学年それぞれに、中学校は特別・特進・普通学術コースの下学年と上学年、および普通技術コースの上学年に分けて記載されている。

ここでは、活動(Activities)、到達目標(Outcomes)、備考(Notes)が学年群ごとに記述されている。なお、「到達目標」は「～ができるようになる」(Pupils will be able to:)という観点で記載されており、「備考」には、学年段階に適した音域や、重点的に指導すべき事項、教授方法、教材の選択のポイント等が具体的に示されている。

3-2. 芸術科音楽のねらいと目的

1992/1993年改訂版シラバスにおける芸術科音楽のねらい(Aims)と目的(Objectives)は、表2に示すとおりである。

表1 1992/1993年改訂版シラバスの記載内容

小学校	中学校
1 はじめに	1 はじめに
2 ねらいと目的	2 ねらいと目的
3 シラバスの概要	3 シラバスの概要
4 インストラクション	4 ガイドライン
・授業時数	・授業時数
・音楽教師の配置	・音楽教師の配置
・記録	5 プログラムの立案
・音楽強化活動	6 音楽強化活動
・専門性の向上	
5 シラバス	7 特別・特進・普通学術コースのシラバス
・第1学年	・ステージⅠ - 下学年
・第2学年	・ステージⅡ - 上学年
・第3学年	8 普通技術コースのガイドライン
・第4学年	9 普通技術コースのシラバス
・第5学年	
・第6学年	
6 評価	10 評価
7 音楽用語集	
8 参考書	11 参考書

表2 1992/1993年改訂版シラバスのねらいと目的

小学校	中学校
○ねらいは、バランスのとれた音楽教育を通して、すべての児童の美的感覚を育成することである。	○ねらいは、以下に示すとおりである。
○目的は、以下に示すとおりである。	・音楽を知覚し、鑑賞する。
・歌唱・聴取・器楽の活動を通して、音楽に対する理解と楽しさを促進させる。	・音を媒体として、考えや気持ちを表現する能力を育成する。
・自己表現と創造性の機会を提供する。	・歌唱・器楽・創作の能力を育成する。
・西洋音楽、東洋音楽、とりわけ地域の民族音楽に対する興味と理解を育成する。	・自己表現や満足感、楽しさのために表現活動に参加する意欲を育成する。
・音楽リテラシーを高める。	・表現活動を通して、社会的スキルや規律を育成する。
	・様々な文化や国の伝統に関する認識と正しい理解を促す。

3-3. 学習領域

1992/1993年改訂版シラバスは、演奏(Performing)・聴取(Listening)・創作(Creating)の3領域を中心に構成されている。また、これらの幅広い領域を統合したバランスの取れた音楽プログラムを提供し、

その目標を達成するために、表3に示す「活動」が設定されている。なお、普通技術コースにおける演奏には、歌唱と器楽の活動が含まれている。

表3 1992/1993年改訂版シラバスの活動

小学校	中学校	
	特別・特進・普通学術	普通技術
<ul style="list-style-type: none"> ・歌唱 ・記譜・読譜 ・聴取 ・創作 ・器楽 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌唱 ・読譜・記譜 ・聴取 ・器楽 ・創作 ・音楽プロジェクト 	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏 ・聴取 ・創作

4. 2002年改訂版シラバス

4-1. シラバスの概要と構造

2002年に改訂されたシラバスは、小学校と中学校で別々に作成されている。

シラバスの記載内容は表4に示すとおりである。

学習内容や到達目標は、小学校は第1・2学年、第3・4学年、第5・6学年の2学年ごとに、中学校は特別・特進・普通学術コースの下学年と上学年、および普通技術コースの下学年と上学年に分けて記載されている。

ここでは、構成要素 (Component)、内容 (Content)、技能 (Skills)、価値 (Values) が学年群ごとに記載されている。「技能」は「～ができるようになる」(Pupils will be able to:) という観点で到達目標が具体的に示されており、「価値」は音楽活動に取り組む際に付加的に伴う情意目標という性質が強い。

表4 2002年改訂版シラバスの記載内容

小学校	中学校
1 はじめに 2 ねらいと目的 3 シラバス <ul style="list-style-type: none"> ・第1・2学年 ・第3・4学年 ・第5・6学年 	1 はじめに 2 ねらいと目的 3 シラバス <ul style="list-style-type: none"> ・特別・特進・普通学術コース下学年 ・特別・特進・普通学術コース上学年 ・普通技術コース下学年 ・普通技術コース上学年
4 評価	4 評価

4-2. 芸術科音楽のねらいと目的

2002年改訂版シラバスにおける芸術科音楽のねらいと目的は、表5に示すとおりである。

表5 2002年改訂版シラバスのねらいと目的

小学校	中学校
○ねらいは、以下に示すとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> ・音楽と日常生活との結びつきに気付き、それを認識するとともに、地域の文化や世界の文化を理解し、その音楽を受容する広い心を育む。 ・創造性と批判的思考力を育成する。 ・個人やグループでの表現意欲、および生涯を通して音楽を愛好する心情を育成する。 	○ねらいは、以下に示すとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> ・様々な文化の音楽やジャンルの音楽を演奏したり体験したりする。 ・以下の知識を獲得する。 <ul style="list-style-type: none"> - 音楽の諸要素に関する基礎的な音楽用語 - 様々な音楽様式 ・視覚的、聴覚的に楽器の種類を識別する。 ・音楽の社会的・文化的・歴史的背景を理解し、音楽と他の芸術様式との関わりに気付く。
○目的は、以下に示すとおりである。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な文化の音楽やジャンルの音楽、特に地域の民族音楽を演奏したり体験したりする。 ・以下の知識を獲得する。 <ul style="list-style-type: none"> - 音楽の諸要素に関する基礎的な音楽用語 - 様々な音楽様式 ・視覚的、聴覚的に楽器の種類を識別する。 ・音楽の社会的・文化的・歴史的背景を理解し、音楽と他の芸術様式との関わりに気付く。 <p>技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌唱や器楽、身体的動作の基本的な技術を理解して、1人やグループでパフォーマンスをする。 ・基本的な音楽の記譜法を理解し、読譜・記譜を行う。 ・指示に従って、音楽をつくったり即興したりする。 ・音楽を聴いて、音楽の基本的な特徴を伝え合う。 ・音楽作品や演奏を簡単に評価する。 <p>価値</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活における音楽の役割を理解する。 ・表現活動を通して、他者と協力しようとする意欲を高める。 ・音楽を演奏する良さを味わうとともに、音楽を敬う。 ・音楽を聴くことや、音楽活動に参加することを楽しむ。 	○目的は、以下に示すとおりである。 <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な文化の音楽やジャンルの音楽を演奏したり体験したりする。 ・以下の知識を獲得する。 <ul style="list-style-type: none"> - 音楽の諸要素に関する基礎的な音楽用語 - 様々な音楽様式 ・視覚的、聴覚的に楽器を識別する。 ・音楽の社会的・文化的・歴史的背景や、音楽と他の芸術様式を正しく理解する。 <p>技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自信をもって、適切な表現や技術を用いて、ソロやアンサンブルでパフォーマンスをする。 ・音楽を正しく演奏し、正しく記譜する。 ・指示に従って、音楽を作曲したり即興したりする。 ・音楽を聴いて、音楽の特徴の分析を伝え合う。 ・音楽作品や演奏を批評する。 <p>価値</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活における音楽の役割を正しく理解する。 ・他者と協力しようとする意欲やその価値を高める。 ・異なる文化の音楽に対する寛容な心を育む。 ・音楽を聴きたい、音楽活動に参加したいという意欲を高める。

4-3. 学習領域

2002年改訂版シラバスにおける学習領域は、大きく聴取（Listening）と表現（Music Making）の2つに分かれている。表現には、演奏（Performing）と創作（Creating）の2つが含まれており、さらに演奏には歌唱と器楽の活動が含まれている。なお「構成要素」と記されているが、1992/1993年改訂版との比較のため、ここでは「学習領域」と表現することとする。

5. 1992/1993年改訂版と2002年改訂版シラバスの比較

5-1. シラバスの概要と構造

両シラバスに共通する点としては、小学校と中学校のシラバスが別々に作成されているという点である。しかし、1992年改訂版では小学校は6学年それぞれに学習内容や到達目標が示されていたのに対し、2002年改訂版では第1・2学年、第3・4学年、第5・6学年の2学年ずつにまとめられており、学年群が変化していることが分かる。また、1993年改訂版では中学校の普通技術コースには上学年にしか音楽が設定されていなかったのに対し、2002年改訂版においては普通技術コースの下学年にも新たに設定されるようになった。図1は、学年群の変化を図式化したものである。

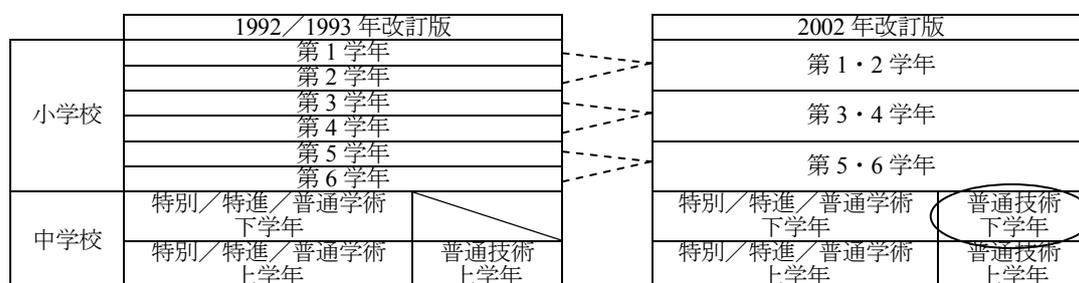


図1 1992/1993年改訂版と2002改訂版シラバスの学年群とその変化

5-2. 芸術科音楽のねらいと目的

両シラバスに共通するキーワードは、多少の表現上の差異は見られるものの、概ね様々な国や地域・文化の音楽の認識・理解、創造性・創造的な表現力の育成、表現意欲の向上の3点に集約できる。

一方、1992/1993年改訂版のみに見られるキーワードは、美的感覚の育成、音楽の楽しさ・演奏や創作の能力の育成、音楽リテラシーの向上である。それに対し、2002年改訂版にのみ記述されているものは、音楽と日常生活との関わりや、批判的思考力の育成、生涯を通じた音楽との関わりが挙げられる。また、様々な国や地域・文化の音楽に関する記述においては、それらを認識し鑑賞することから、それを踏まえて音楽や文化を受容し、偏見のない広い心を育成することにまで言及している。

また、2002年改訂版に関しては「価値」の部分が拡大されて示されている。1992/1993年改訂版では中学校のシラバスのねらいの一部として記されていた音楽学習を通じた社会的スキルや規律の育成、および様々な文化や国の伝統に関する認識・理解の部分が、2002年改訂版では「価値」という目的の独立した1つの項目として位置づけられるようになった。

5-3. 学習領域

1992/1993年改訂版では「演奏」「聴取」「創作」の3領域で示されていたものが、2002年改訂版では「演奏」と「創作」を「表現」という領域に集約し、「聴取」「表現」の2領域へと変化した。学習領域の枠組みは異なるものの、それぞれの学習内容に大きな差異は見られなかった。図2は、学習領域の変化を図式化したものである。ただし、1992/1993年改訂版においては、3領域の内容を達成するために、歌唱や読譜・記譜、聴取、創作、器楽等の主たる音楽活動が示されている。

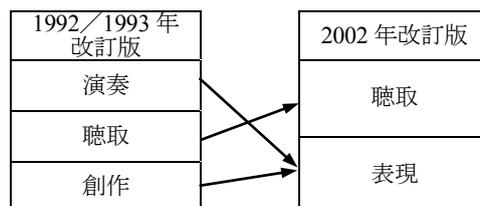


図2 1992/1993年改訂版と2002年改訂版シラバスの学習領域とその変化

5-4. 学習内容や到達目標

両シラバスの学習内容や到達目標を比較するため、「歌唱・器楽」「創作・即興」「聴取」「音楽の諸要素」の4つの観点に整理し、分析を行う。

(1) 歌唱・器楽

両シラバスに共通した内容として、歌唱における階名とハンドサインの使用、および器楽における打楽器（無音程打楽器、有音程打楽器）と旋律楽器（リコーダーなど）の使用が挙げられる。また、各学年段階で取り組む教材の内容も概ね一致していることが分かった。特に、歌唱においては、言葉・リズム・旋律のオスティナートや簡単な2声カノン（第1・2学年）から、2声カノンやパートナーソング、簡単な2声の歌（第3・4学年）、最大4声までのカノン（第5・6学年）という系統的な内容が設定されている。アクションソング³⁾や童謡、あそび歌、自国や他国の伝統的で簡単な歌（第1・2学年）、民謡（第3学年）、ポピュラー音楽（特別・特進・普通学術コース下学年）が各学年段階に設定されているのも一致している。

ただし、1992年改訂版では有音程打楽器の使用は第2学年から、歌唱で3声のカノンに取り組むのは第4学年からと示されているのに対し、2002年改訂版では、それぞれ第3・4学年から、第5・6学年からと示されている。また、2002年改訂版では第1・2学年からナショナルソングに取り組むのに対し、1992/1993年改訂版では第3学年からとされていたり、1992改訂版では特別・特進・普通学術コース下学年で芸術歌曲を学習する一方で、2002年改訂版では同学年段階で地域の民族音楽を学習するなど、学習内容や教材と学年段階との間に若干のずれや変更が見受けられた。

大きく異なる点としては、1992年改訂版では、第1学年ではC4～A5のように、各学年の発達段階に応じた声域が明記されている点が挙げられる。また、1992年改訂版で習得するように示されているリコーダーの運指は2002年改訂版に比べて多いことが分かった（E5・F5：第5学年、C#4・C#5：第6学年）。

(2) 創作・即興

両シラバスとも、動き（ボディパーカッションを含む）や言葉を通じた創作から、リズム・旋律パターンづくり、リズム・旋律フレーズづくり、音楽作品づくりへ、という大きな流れは共通しており、これらに取り組む学年段階にも大きな変化は見られない。

ただし、つくったものを五線譜に記譜する学習に関しては、1992/1993年改訂版が第5学年から示されているのに対し、2002年改訂版では第3・4学年から設定されており、より早期に記譜の学習が開始されていることが分かる。また、2002年改訂版では第1・2学年での学習内容に図形譜が加えられている。

また、お互いにつくった作品やその演奏に対し評価・批評する学習が、1992/1993年改訂版では特別・特進・普通学術コースの上学年で初めて設定されているのに対し、2002年改訂版では第5・6学年から開始されている。小学校段階から学習者が相互に評価を行う学習を取り入れることによって、より多くの経験を蓄積させ、これらの能力をより確実に身に付けさせようとしていることが分かる。

(3) 聴取

両シラバスとも、聴取における目的は共通しており、音楽の諸要素や曲の雰囲気を感じ取ること、楽器を識別すること、様々な文化や様式の音楽を識別し、多様な社会的・文化的・歴史的背景における音楽の役割や意義を理解することの3点に集約することができる。

音楽の諸要素や曲の雰囲気に関しては、両シラバスともに、それぞれを感じ取り言葉で表現する学習から、音楽の諸要素と曲の雰囲気を結びつける学習へと発展している。楽器の識別や、様々な文化や様式の音楽に関しても、自国を構成する主要3民族の楽器を含む西洋・東洋の様々な楽器や音楽を学習することで一致している。ただし、2002年改訂版ではこれらに加えて電子楽器が学習される。また、現代音楽や、ダンスの音楽、オペラやミュージカルなど他の芸術様式と関連した音楽が含まれるほか、音楽を言葉や絵、身体動作などで表現する学習も設定されている。

聴取する音楽や、それによって学ぶ内容などに基本的に大きな変化は見られなかったが、グローバル化やITの進歩など、時代や社会の変化に合わせて扱う音楽や学習内容が拡大されていることが確認できた。

(4) 音楽の諸要素

取り扱う学年段階に若干のずれはあったものの、内容そのものに大きな変化は見られなかった。ただし、2002年改訂版には8分休符、付点8分音符、16分休符までの音符が設定されていたが1992年改訂版では設定されていない一方で、2002年改訂版では扱われていなかった複合拍子やコード（I・IV・V）の学習が1993年改訂版では設定されている。なお、2002年改訂版では「音楽の諸要素」という内容の部分を取り出して示しているが、1992/1993年改訂版では相当する項目が見られなかったため、すべての学習領域から音楽の諸要素を抜き出して示した。

6. シラバスの変化に見られる教育改革の影響

シンガポールにおける1992/1993年改訂版と2002年改訂版の芸術科音楽のシラバスを比較した結果、1992/1993年改訂版シラバスは、ねらいや目的が大まかに示されており、その分学習活動を細分化し、それに沿って学習内容や到達目標を記すことによってシラバスを構築している一方、2002年改訂版では、ねらいや目的が詳細に示されており、学習内容や学習方法は大きな学習領域のまとまりで記されているという相違点が見受けられた。2002年改訂版では、音楽教育において育成すべきもののうち、音楽を手段とした能力や態度がねらいに、音楽そのものの技能や態度が目的にそれぞれ焦点化された上で、より具体的かつ明瞭に記載されている。

また、1992/1993年改訂版では中学校のシラバスのねらいの一部として記されていた音楽学習を通じた社会的スキルや規律の育成、および様々な文化や国の伝統に関する認識・理解の部分が、2002年改訂版では拡大され、「価値」という独立した1つの目的として位置づけられるようになった。「価値」を重要視する姿勢は小・中学校における音楽教育全体のねらいにも見受けられる。音楽の授業にとどまることなく、学校生活や日々の日常生活にも生かされる能力や態度を育成すること、およびそれらの中に音楽教育の価値を見出させることが目指されている。音楽そのものの学習を重視していた1992/1993年改訂版から、音楽を手段とした学習を重視する2002年改訂版へと、音楽教育の方向性が変化したと捉えることができよう。

学習内容や到達目標に関しては大きな変化は見られなかった。音楽の授業には、音楽活動を行うにあたって子どもが身に付けておくべき基本的で最低限度の学習内容があり、両シラバスではそれらを達成するように設定されていた。ただし、グローバル化やITの進歩など、時代や社会の変化に合わせて、取り扱う音楽や学習内容が拡大されていることも分かった。

教育改革前後のシラバスを比較することによって明らかになった教育改革の影響は、シラバスの構造の変化、ねらいの変化、および学習内容と学年段階の変化の大きく3点に見受けられる。

シラバスの構造の変化に関しては、2002年改訂版シラバスにおいて、普通技術コースの下学年に音楽のカリキュラムが新たに設置されたことが挙げられる。これは2001年の「学校における芸術教育の拡充」によるもので、芸術教育の目標を達成するために、これまで普通技術コースには上学年のみにしか設定されていた音楽の授業を下学年にも拡張するように示されていたものが反映されていることが分かった。

ねらいの変化に関しては、2002年改訂版シラバスにおける音楽教育のねらいに、1997年の「国民教育」や「考える学校・学ぶ国家」の影響が色濃く見受けられる。様々な国や地域・文化の音楽に関する記述が、それらを認識し鑑賞することから、それを踏まえて音楽や文化を受容し、偏見のない広い心を育成することにまで言及しているほか、批判的思考力の育成や、生涯を通して音楽を愛好する心情を育てることが明記されるようになった。

学習内容と学年段階の変化に関しては、ナショナルソングへの取り組みが、1992/1993年改訂版では第3学年からであったのに対し、2002年改訂版では第1・2学年からレパートリーに含めるように記されていることが挙げられる。小・中学校すべての学年を通じてナショナルソングを演奏することによって、「国民教育」が提唱した国民全体の共通の価値観や、「シンガポール人」としての意識の涵養を強化しようとするものであると考えられる。また、音楽や演奏に対する評価・批評を行う学習が、1992/1993年改訂版では中学校上学年での学習内容として設定されているのに対し、2002年改訂版では小学校段階から開始されるようになったことには、2001年の「学校における芸術教育の拡充」の影響がうかがえる。芸術に対する正しい鑑賞力や批評力を身に付けさせ、未来の芸術の享受者としての基礎を高めるため、より早い学年段階

から長期間の、また継続的な学習を行うことができるように配慮されたためと考えられる。

おわりに

本稿では、シンガポールの小・中学校芸術科音楽のシラバスのうち、1992/1993年改訂版と2002年改訂版を取り上げ、両者を比較・検討することによって、その間に行われた教育改革の影響を明らかにすることを目的に、シラバスの構造やねらい、学習領域、学習内容や到達目標の観点から分析を行った。

音楽という教科の特性上、学習内容や到達目標には大きな変化は見られなかったものの、シラバスの構造やねらいに関しては、教育改革を反映したものとなっていることが分かった。

1997年のカリキュラムの改訂において、経済や技術、社会のニーズなどの変化に対応するための最大30%の学習内容の削減、および児童・生徒主体型の教育への転換による考える力の育成が目指された。しかし、芸術科音楽においては、1992/1993年改訂版から2002年改訂版にかけて学習内容の量的削減は見受けられなかった。習得すべきリコーダーの運指が少なくなるなど、削減・縮小された内容もあったが、その分時代や社会のニーズに合わせた新しい内容が取り入れられており、量的な変化は見られなかった。音楽の授業において最低限教えなければならない学習内容があり、それらはシラバスの構造やねらいの変化に関わらず、両シラバスに一貫したものであったと言える。

また、1997年から継続的に行われているICTマスタープランについても、本研究の中ではその影響を見出すことはできなかった。これに関しては、学習内容や到達目標よりも、教授方法・学習方法に影響を与えるものであり、教科書や実際の授業の場面では何らかの変化があると推測される。

森山(2014)は、シンガポールの小・中学校芸術科音楽2002年改訂版と2008年改訂版シラバスを対象に、両者を構造やねらい、学習領域、学習内容や到達目標の観点から比較・検討することによって、2008年改訂版シラバスの特徴を明らかにした。2008年改訂版は、ねらいや学習内容・到達目標に関しては2002年改訂版と概ね一致している。ただし、シラバスの構造が小・中学校一体型の柔軟性に富んだものへと変化するとともに、学習内容や到達目標が大まかに記述されるようになり、大綱的でミニマムスタンダードな性格をもったシラバスへと変化した。これらは、子どもがもつ様々な音楽経験や音楽能力の差に対応し、個々の子どもに合った学習を提供するための施策であると考えられる。

1992/1993年改訂版から2002年改訂版において、音楽そのものの学習を重視する音楽教育から、異文化を理解し受容する態度の育成、批判的思考力や社会的スキルの向上など、音楽を手段として諸能力を育成することを重視する学習へと、音楽教育は変化した。その方向性は2008年の改訂に引き継がれ、目指す音楽教育をより効果的に、より確実に達成するための方法論的な改訂に至るのである。

今後は、最新の2015年改訂版シラバスの分析を行い、教育政策や教育改革の動向をふまえて、シラバスのもつ教育的意味について検討していく。

付記：本稿は、平成27年10月3日・4日に開催された日本音楽教育学会第46回大会での口述発表をもとに、加筆修正したものである。

注

- 1) 日本の学習指導要領に相当するシラバスは教育省が策定・発行している。近年の小・中学校芸術科音楽のシラバスの改訂は、1992/1993年、2002年、2008年、および2015年に行われている。
- 2) 2008年以前は、特別・特進・普通学術・普通技術の4つのコースに分かれていたが、このうち特別コースと特進コースが「特進コース」として統合され、2008年1月の入学生から適用された。
- 3) 振り付けなどの身体動作が付随する歌。

引用・参考文献

- Curriculum Planning Division, Ministry of Education Singapore (1992) *Primary School Syllabus Music*.
- Curriculum Planning Division, Ministry of Education Singapore (1993) *Music Syllabus Lower & Upper Secondary - Special, Express & Normal (Academic) Courses Upper Secondary - Normal (Technical) Course*.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (2002) *Music Syllabus Primary*.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (2002) *Music Syllabus Secondary*.
- 神代浩 [研究代表者] (2011) 『教育課程の編成に関する基礎研究報告書 2 諸外国における教育課程の基準』(平成 22 年度 調査研究等特別推進経費調査研究報告書) 国立教育政策研究所, pp. 101-110。
- 森山実華 (2014) 「シンガポールにおける小・中学校芸術科音楽のシラバスに関する研究—2002 年版と 2008 年版の比較を通して—」『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第 60 巻, 中国四国教育学会, pp. 511-516。
- 佐々木幸 (2005) 「シンガポールの教育改革と初等学校図画工作新シラバス」『美術教育学』第 26 号, pp. 195-207。

参考 Web 資料

- 財団法人自治体国際化協会 (シンガポール事務所) 「シンガポールの政策 (2011 年改訂版) 教育政策編」
<http://www.clair.or.jp/j/forum/pub/series/pdf/j37.pdf> (2014.06.16 取得)
- ENHANCING ARTS EDUCATION IN SCHOOLS (2001)
<http://www.moe.gov.sg/media/press/2001/pr11092001.htm> (2014.02.09 取得)
- ENHANCING ARTS EDUCATION IN SCHOOLS (2003)
<http://www.moe.gov.sg/media/press/2003/pr20030104a.htm> (2014.02.09 取得)
- Learning, Creating, Communicating : A Curriculum Review
<http://www.moe.gov.sg/media/speeches/1998/CurryRevueReport.htm> (2014.02.09 取得)
- MOE Launches Third Masterplan for ICT in Education
<http://www.moe.gov.sg/media/press/2008/08/moe-launches-third-masterplan.php> (2014.02.09 取得)
- Opening Address by Dr Ng Eng Hen, Minister for Education and Second Minister for Defence, at the International Conference on Teaching and Learning with Technology (iCTLT) at the Suntec Convention Hall, on Tuesday, 5 August 2008
<http://www.moe.gov.sg/media/speeches/2008/08/05/opening-address-by-dr-ng-eng-h-1.php> (2014.02.09 取得)
- SPEECH BY BG LEE HSIEN LOONG, DEPUTY PRIME MINISTER AT THE LAUNCH OF NATIONAL EDUCATION ON SATURDAY 17 MAY 1997 AT TCS TV THEATRE AT 9.30 AM
NATIONAL EDUCATION
<http://www.moe.gov.sg/media/speeches/1997/170597.htm> (2014.02.09 取得)
- SPEECH BY PRIME MINISTER GOH CHOK TONG AT THE OPENING OF THE 7TH INTERNATIONAL CONFERENCE ON THINKING ON MONDAY, 2 JUNE 1997, AT 9.00 AM AT THE SUNTEC CITY CONVENTION CENTRE BALLROOM
SHAPING OUR FUTURE: THINKING SCHOOLS, LEARNING NATION
<http://www.moe.gov.sg/media/speeches/1997/020697.htm> (2014.02.09 取得)
- SPEECH BY RADM TEO CHEE HEAN, MINISTER FOR EDUCATION AND 2ND MINISTER FOR DEFENCE AT THE LAUNCH OF THE MASTERPLAN FOR IT IN EDUCATION ON MONDAY 28 APRIL 97 AT SUNTEC CITY AT 10 AM OPENING NEW FRONTIERS IN EDUCATION WITH INFORMATION TECHNOLOGY
<http://www.moe.gov.sg/media/speeches/1997/280497.htm> (2014.02.09 取得)